

# 自伝的記憶における想起の視点と想起時期の関連性の検討

井関龍太<sup>1\*</sup>・川崎恵里子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>筑波大学心理学系・<sup>2</sup>川村学園女子大学文学部)

Key Words: 自伝的記憶, 想起の視点, 手がかり語法

自身の過去の経験を思い出すとき、また、未来に起こりそうな事柄や空想上の場面を思い浮かべるとき、一人称の視点か三人称の視点によってその情景を思い描くことができる。ここで、一人称の視点とは、実際に自分の目で眺めたかのように情景を思い描くことをいう。三人称の視点では、第三者の立場から、あるいは、カメラで記録した映像のように状況が再現される。一人称の視点の場合、思い描いた情景の中に自身が現れることはないが、三人称の視点では、自分自身の像を思い描いたり、実際とは異なるアングルからの描写がなされることがある。

Libby & Eibach (2002) は、現在の自己と一致する行動と一致しない行動を想起する際の想起の視点を検討した。彼女らの予測によると、現在の自己と一致しない記憶を想起するときには、より自己を省みる必要があるため、一人称の視点よりも三人称の視点からの想起が多くなる。実験の結果、過去の自分の行動の想起においても、将来の自分の行動の想像においても、現在の自己と一致しない情景を思い描く場合には、そうでない場合よりも三人称の視点からの想起が多かった。さらに、Libby et al. (2005) は、逆に想起の際の視点を指定し、三人称の視点からの想起では、一人称の視点からの想起よりも、自己変化の評定が高くなることを示した。これらの研究は、現在の自己との距離が想起の視点と関係することを示している。

しかし、自己の変化と自伝的記憶の想起を明示的に関連づけることは、視点の報告の際にバイアスを生じやすいかもしれない。現在の自己とは違うという意識が想起経験に関わらず三人称の視点を報告させる可能性が考えられる。そこで、本研究では、イメージ性の異なる手がかり語からの自伝的記憶の想起を求めた。一般に、イメージ性の高い手がかりは、より古い記憶を喚起しやすい (e.g., Rubin & Schulkind, 1997)。現在の自己との距離が近いイベントを想起する際に三人称の視点が採られやすいのであれば、高イメージ語でも三人称の視点が経験されやすいと予想される。想起の視点と想起時期の他に、鮮明性と楽しさについても補足的に評価を求めた。

## 【方法】

実験参加者: 女子大学の学生 20 名。

要因計画: 高イメージ語条件と低イメージ語条件の 2 水準の 1 要因被験者内計画。

材料: “NTT データベースシリーズ・日本語の語彙特性”(天野・近藤, 2003; 佐久間他, 2005) から二字熟語を抽出し、文字単語親密度が同程度の語の中から、イメージ性の高い 5 語 (文字単語心像性は平均 6.24) と低い 5 語 (文字単語心像性は平均 4.69) を想起の手がかり語として選んだ (高イメージ語 = 鉛筆, 黒板, 写真, 水泳, 電話; 低イメージ語 = 感想, 季節, 時間, 熱中, 無礼)。各手がかり語は 1 語ずつ別々のカードに印刷した。各カードには、手がかり語の下部に想起したイベントの内容を書く欄とイベントの生起時期、想起の視点、想起の鮮明性の報告を求める欄を設けてあった。カードは参加者ごとにランダムな順で提示した。

手続き: 実験は個別に行った。参加者には 1 枚ずつカードを渡し、記載された手がかり語から思い出す自身の過去の経験をカードに簡単に記述するよう求めた。このとき、ある時期に関する一般的な記述をするのではなく、特定の場所・日時に関わった具体的なイベントを思い出すよう促した。イベントを思い出したらすぐに内容の説明を書いてもらい、それから目を閉じてイベントの起こっている情

景をできるだけくわしくイメージするよう求めた。その後で、想起したイベントの生起時期、想起の視点、想起の鮮明性を尋ねた。生起時期は、誕生から現在までを表す数直線上にのしを付けることで回答してもらった (誕生時 = 0 cm ~ 現在 = 13 cm)。想起の視点は、一人称か三人称の二択であった。一人称の視点については、“出来事をもともと経験したのと同じ視点から見た場合です。ふだん自分の目を通して周囲の世界を見ているのと同じように、記憶の中の情景を自分の目を通して見ている状態です。”と説明した。三人称の視点については、“出来事を第三者の立場や記録した映像のような視点から見ている場合です。この場合、記憶の中の情景では、自分の周囲の様子だけでなく、自分自身が見えることもあります。”と説明した。想起の鮮明さは、“1 = まったくはっきりしない”から“5 = とてもはっきりしている”までの 5 段階評定であった。1 つの手がかり語についての評価を終えると次のカードを配り、同様の手続きを繰り返した。最後のカードを終えた後、記述したすべてのカードを見てもらいながら、各イベントの楽しさを 5 段階で評定してもらった (“1 = まったく楽しくなかった” ~ “5 = とても楽しかった”)。

## 【結果と考察】

想起経験の評価の平均値を Table 1 に示した。以下では、それぞれの従属変数について対応のある t 検定を行った。

イベントの生起時期: 想起したイベントの起こった時期について尋ねたところ、高イメージ語を手がかりとして想起したときの方が、低イメージ語を手がかりとしたときに比べ、より過去に起こったイベントを想起していた ( $t(19) = 3.78, p < .01$ )。そこで、イメージ語の操作によって想起されるイベントの時期を適切に統制できていた。想起の視点: 報告された視点について、一人称 = 0, 三人称 = 1 として得点化した。三人称視点率を計算したところ、どちらの手がかり語からも三人称視点からの想起は 40% 程度であり、条件間で有意な差は見られなかった ( $t(19) = .25, p = .80$ )。したがって、手がかり語のイメージ性の違いによっては、想起の視点は影響を受けなかった。このことから、想起の視点の変化には、自己の変化との明確な関連づけが重要であることが示唆された。

想起の鮮明性: 高イメージ語を手がかりとしたときには、低イメージ語を手がかりとしたときよりも、想起経験が鮮明でないと評価される傾向が見られた ( $t(19) = 1.89, p = .08$ )。このことは、高イメージ語からはより古い記憶が想起されたためと考えられる。

イベントの楽しさ: 高イメージ語から想起した記憶の方が低イメージ語からの想起よりも、より楽しい経験であったと評価された ( $t(19) = 2.43, p = .03$ )。このことは、古い記憶を想起する際にはより印象に残った記憶が選ばれやすいためかもしれない。

Table 1 想起経験の評価の平均値 (SD)

	時期	三人称視点率	鮮明性	楽しさ
高イメージ	7.74 (1.55)	.42 (.29)	3.58 (0.66)	3.38 (0.71)
低イメージ	8.89 (1.06)	.40 (.30)	3.90 (0.55)	2.95 (0.61)

時期の単位は cm (最大 13 cm)、鮮明性、楽しさは 5 段階評定; かっこ内は標準偏差を表す

(ISEKI Ryuta & KAWASAKI Eriko)

\*現在、日本学術振興会特別研究員 PD (京都大学)